

## 第2部 ディスカッション

(池上)

それでは第2部（ディスカッション）に入りたいと思います。時間にしてちょうど1時間、4時半を目処に進めて参ります。

まず皆さんからたくさんご質問をいただいたので、それをちょっと、取捨選択を私の判断でさせていただくこととなりますが、少し絞って各パネリストにお答えいただきます。その後、フロアの皆さんからご意見などをいただければと思っています。

それではまず私宛にいただいたものなんですけど2つあります。静岡文化芸術大学の外国人留学生は少ない訳だけでも将来の受け入れ計画はどうなってますか。例えば九州の立命館アジア太平洋大学などはとてもユニークで、英語の授業が半分になってるんだけど、どのような計画がありますかっていうことです。本学については具体的に留学生をこれから大量に受け入れるという目標は作ってはおりません。というか、県立の大学なので、やっぱり地域の学生をしっかりと受け入れるというのが、まず第1でしょうし、さらに全国的な展開をして私どもの大学の教育に合致した学生を受け入れたいということで具体的な将来計画は、留学生に関しては明確にこういう方法でというのはまだありません。

次に多文化共生とお芝居との関係について私は若干お話をしましたが、それはどういうことですかというのがありました。これは今ここで話し始めるととても長くなってしまうんですが、一言だけその概念を申し上げると、お芝居を見ることによって多様な言語、文化的背景の人たちがひとつの時間と空間を共有する。わははと笑ったり登場人物に感情を寄せたりというところがまず1歩だろうと思うし、それからひとつのお芝居を一緒に作るというところで、歩み寄り、相互理解のきっかけがあると思います。さらに私たちは子どもが関わるようなお芝居プロジェクトをやることでその親御さんたちが出会うような、そんなきっかけにつながればいいなあと考えております。

それでは先ほどの発表の順番に応じてこれからいくつか私から質問を投げっていきますので答えをしていただければと思います。まず山本かほり先生には韓国の話についてとてもたくさんの質問がありました。どれからお話しすればいいのだろうかと私自身ちょっと困っているんですけど、まず大きな政策の枠組みの話について。

外国人労働者についてももう少し教えてください。つまり今日は多文化家族の話が多かったんだけど、あまり韓国の政策の正面からの対象になっていない労働者のこと。例えばどんな国からどんな人たちが入国し、どんな仕事をしているのか、あるいは労働者への韓国語教育っていうのは地域ではあまりないんですかというようなことです。

それからちょっと専門的になるんですけど、韓国の労働者に対する労働許可制が3年までの定住防止を法制化したということですが、どうですかと。まあちょっと労働者を巡る法律のことかな？これをお願いします。

それから2つ目として、今日のお話にあった国際結婚家族の支援を巡る話です。夫の職業は農林漁業の従事者の約36%が国際結婚ということの意味がよく理解できませんでした。なぜ農村部で国際結婚が多いんですかということですか。

韓国の永住外国人者の地方参政権の話ですが、これは在住外国人側が要求したものですかという質問です。

(山本)

まず労働者の問題ですけど、どこの国が多いんでしょうかというのは、雇用許可制というのは韓国と相手の国と政府間の協議をしてきめているんです。東南アジアとか南アジアの国々が多いですね。ネパールとかバングラデシュとかパキスタン、フィリピン、ベトナム、東南アジア、南アジアが中心に何か国かあるわけです。それはどういうことかといったら、初めは3年で来ていいです。で、5年まで延長していいです。その後は絶対に帰ってくださいっていうのがこれまでの政策だったんですが、実際なかなかその運用は厳しいということです。いろんな議論の中でそれを延長できるようにしようという議論が起こっているんだというところまで私はその政策に携わっている人から聞きました。はっきり分かりません。ただ韓国としてはそういう、どこで働いているかっていったら工場ですので、製造業ですから非熟練労働ですね。そういう人たちは、韓国は定住としては受け入れないという立場に今のところは明確なんです。だから帰ってくださいという風に政府は言っています。だから完全にローテーションってやつですね。それが韓国の一貫した雇用許可制という外国人労働者施策です。

まずなぜ農村部に多いかといったら、国際結婚の話に戻して、なぜ農村部に国際結婚が多いかっていったら、さっきちょっと足早に話しましたが、韓国の男性というのは結婚難なんですね。日本の農村部の男性が結婚難なのと同じです。収入がなかなか安定しない。どうしても低学歴に偏りがちということです。よく学生たちにも言うんですが、女性たちの結婚の志向というのが少し上昇志向なんですね。だから自分と同程度もしくは自分より高い人と結婚するという傾向がありますので、どうしても、こういう言い方は変ですが低階層の男性は結婚難に陥りやすいということです。親御さんで来た外国人たちも認識して、さっき申し上げました、お嫁さんたちを教育するときに言ったときに、なぜ私は韓国にいるのかって言ったときに、韓国の女性が悪い。何でって言ったら韓国の女性は農村の人と結婚しない。なぜ結婚しないのか。まずしいから。貧乏だから。仕事が大変だから。じゃあ何であなた方は来たかという、うちの国はもっと貧しいから。ちょっとでも韓国の人とは豊かになる。じゃあ韓国の一番豊かな女性はどこに行くのって言ったら、アメリカとか言ってました。アメリカの一番豊かな女性は誰と結婚するのって言ったら、困ったなあって言ってました。結婚する人がいないねん。だから結婚難かとか言ってましたけど、そういうサイクルの中だという風に一般的には言われています。要するに夫の職業の農林漁業従事者の35.9%が国際結婚というのはこういうことかかっていったら、農村部の4割くらいが国際結婚だという風に考えてくだされば結構です。だからかなりの数で、かなりの率で国際結婚。いわゆる国際結婚が行われているということです。

参政権に限らず韓国というのは、先ほど学生運動の話をしましたけど、NGO活動とか市民活動が基本的には非常に盛んな国なんです。そこが国を動かしてくる部分は正直言っているんですね。すごいトップダウンで上からバーンと押さえる部分もあるんですが、割りに下からの力っていうのが強くて、そういう緻密な運動の積み上げがあったことは確かです。本人というよりは人権という意識が強いので、人権団体の中の動きだという風に聞いています。

(池上)

質問第2弾ですね。多文化家族の子どもの教育の問題について韓国社会はどんな問題がありますか。母親に再婚先の韓国人家庭に呼び寄せられた子どもたちはいますかっていうことで、おそらくこれは日本の今、フィリピンの子どもたちのこととすごくリンクすると思います。フィリピンの女性が日本人と結婚してしばらくたってフィリピンから子どもを呼び寄せると、日本語を全然できない子どもたちが日本の学校などにぼーんとしてくるという状況と並行的な関係かなあというのがひとつ。

それからちょっとこれは専門的になるんですが、医療通訳のようなものについてもご存知でしたら、一次医療レベル、つまり地域の医療機関では随分と通訳はあるけど、より上の、2次、3次の高度医療レベルのようなどころでは医療通訳、どんな塩梅ですかということ。この2つを具体的に。

(山本)

まず分からない方から。医療通訳はちょっと分かりませんので申し訳ございません。また改めて調べておきます。

子どもですね。実は2年位前に韓国の研究者を3人くらい呼んできて愛知県立大学でシンポジウムをやったんです。このときになかなか議論が噛み合わなかったのは、子どもの問題に全然韓国は焦点が当たらないんです。問題ないって言うんですね。何でないのって言ったら、お父さんは韓国人だしお母さんは外国人だけど基本的に韓国語で育ってるからブラジル人のような問題はないって言い切ってたんですよ。そんなことはないと思い、これから問題が起こると思うって言ったら、まだ子どもたちが小さいからそういう問題にならないのかなあっていう風に言っていたんですね。それが2009年の1月の終わりくらい。ちょうど2年位前のシンポジウムです。ただ去年の11月に韓国に呼ばれてシンポジウムに出たんですけど、そのとき韓国の女性開発研究院っていう、要するに女性政策を国家主導でやっている韓国の研究所があるんですね。そこの研究員が発表してましたけど初めて子どものことを取り上げてました。その問題は何かって言ったら、やっぱり言語の問題で、ブラジル人とか、要するに2言語、3言語で育つ子どもたちの言語形成の問題とか。でもそこで1番問題になっていたのは主言語が韓国語だという問題です。つまりここではお母さんの言語ですね。お母さんの言語が取られてしまう。つまりお母さんとコミュニケーションが取れなくなってしまって非常に子どもたちの状態が悪くなるっていう問題が初めて取り上げられているのを聞いて、それは大量のアンケート調査の結果をわーっと説明してたんですけど、やっと子どもたちの問題に焦点が当たりだしたという段階です。

また学力の問題とかそういうのはなかなかでなくて、寧ろ韓国というのは非常な競争社会で小さいときからわいわいわいわ競争させますから、多分これは私の考えですけど大学の先生方も含めて、またそういうところからの落ちこぼれという風にしかまだ見てないんじゃないかなと思うんですね。文化間の問題とか家庭の2重言語の問題とかそういうことに起因した学習の遅れみたいなものにはまだ捕らえてないようなそんな印象を持っています。

(池上)

はい。子どもの関連で宛先が山本先生となっていないけど質問があります。日本は義務教育だけ外国籍の子どもは対象外と聞くけれど、それは本当ですか。法律的に今後変わる可能性はあるんですかということです。これは今国レベルではかなり重要な焦点になっていることで、まず日本は外国籍の子どもを義務教育の対象としていません。法律的に今後変わる可能性があるのかというのは可能性があるかもしれないと私は考えています。ただ問題は義務としたときにどの学校に行けばその義務は果たせるのかというところで議論があります。つまりいわゆる日本の学校に行くべきなのか、あるいはエスニックスクールを含めて義務の対象とするのか。そうすればエスニックスクール、民族学校、外国人学校というのはどのレベルの学校をもって義務の対象と見做すかっていうような議論があります。山本先生に質問なんですが、韓国の場合外国籍の子どもたちの教育義務はどうなっているか、それから子どもは、お父さんが韓国人だったら韓国籍を取ると思うんですけど、今のその外国籍の子どもの問題は浮上してきますか。

(山本)

それもあまりまだ聞いたことがなくて、というのはやっぱりさっきもずっと言ったように、いろんな資料が国際結婚家族にぼんと焦点が当てられるものですから、私のところに入ってくるいろんな状況というのは、韓国籍を持っている子どもたちの状況です。お父さんが韓国人ですので父系で国籍を取れますから各地で取れるんですね。ただこの間一緒にシンポジウムに参加していた、富に川と書いてプチョンと読むんですけどそこにある外国人市民団体。外国人支援の市民をずうっと運動している女性の発表を聞いたんですけど、そこに外国人の子どもたちが在籍して外国人の子どもたちと一緒に遊んでいるシーンというのが何回も出てきたんですね。この子たちのビザはって言ったら、不法ですよって言われて、不法でも受け入れるんですかって言ったら、制限はありますが学校は受け入れますということです。日本は何年か前に名古屋なんかはなってますけどそれもスピードが速く受け入れですね。危険じゃないですかって言ったら、相当危険ですとは言っていました。危険というのは要するに捕まってしまうということなんですが、たださすがに学校には観察に来ませんからというようなことを言っていました。

(池上)

ありがとうございます。もうひとつだけ。かなり大きい話。韓国は日本よりも国レベルでの多文化共生が進んでいるということであったと。韓国は多文化共生庁のような国とし

での推進機関があると思いますけど、その役割、重要性について教えていただければということですよ。

(山本)

まだ国としてできているという話は私は聞いてないんですけど、まだ多文化共生庁という形で日本の省レベルでできているという話は聞いてないんですが、何か言葉で言うと省庁横断的なそういうものができたというのは聞いてるんですね。ただやっぱり先ほども言ったように非常にトップダウンの国ですから可能性は十分にあってそこがある程度吸い上げて下に下ろしていくっていうのはあるんですが、ただ韓国で発表されるいろんな法律を見るとばらばらです。なりなり、日本でいうところの厚生労働省がこういう法律を出す。日本でいうと労働省が法律を出す。日本でいうと文部省が法律を出すっていうことですので、まだその日本で想定されているような多文化共生庁のような役割っていうのは韓国でも十分にされてないのではないかと思います。

(池上)

ありがとうございました。これで山本先生は解放されます。

次に吉富先生に3つあります。最初の2つが関連すること。地域に散在する外国人の方への情報提供手段はどんな方法がありますか。おそらくどういう方法を取ってますかということ。それと関連して地域社会で双方向のコミュニケーションが大事だということだった。これはとても関心を持ちました。もう少し具体的に双方向ってことについてお話いただけますか。まずこの2つ。

(吉富)

情報提供ですけど、これは多メディアで、あらゆるもので、あらゆる機会を捕まえて情報提供するっていうのがいいと思います。何かを、この部分は多言語にしたからOKとかそういう、これを使えばOKとかではないんですね。行政が提供するときには何かマニュアルで揃えないといけないみたいなところから始まってしまうんですけど、私たちの場合は、可能な限りの言語で、できるだけ多く多言語にして提供するようにしています。今回は私たちの組織の成り立ちとかのお話はしなかったんですが、うちにあるラジオ局のラジオも使えますし、ペーパーも使えますし、ホームページも使えますし、いちばん提供で効果があるのは、当事者の人たちが自分の言葉で発信する情報誌、エスニックメディアっていうか、立派なものではなくても自分たちの言葉で発信するペーパーですね。そういうものをできるだけ作れるようにサポートする実は効果があるように思います。そしてそれを見て当事者の中- 同じ言葉をしゃべるとい意味の当事者の- で情報が伝わるっていうのがとても効果的だと思います。双方向のコミュニケーションというのは、例えば外国人と日本人が、2つのカテゴリーがあって対立しているというイメージではなく、どういう情報もどういう立場の人であろうと、コミュニケーションというものは、そもそも双方向のものでしょね。一方だけでこっちが言いたいことを、「はい、どうぞ」と知らせるとい

ことではないという意味で、あえて「双方向」という言い方をします。例えば介護保険制度というものができました、それは子ども手当でもいいですが、その制度を、国がそれを伝えるために多言語をしましたって、それだけで終わる、それが目的ではないのだとわかってほしい。もちろんそうやってお知らせを出すんですけど、そのことについて、その後のやりとりができることも含めての提供を、はじめから考えておかなければ意味がないのではないかと思います。それは多言語に限らず、いろんな情報を多言語にするときに、やさしい日本語も使います。つまり、住んでる人の使う言葉の数と同じだけの翻訳って不可能なので、やさしい日本語とかを使うんですけど、やさしい日本語を使うと、意外にもお年寄りもわかりやすいつて喜んでくれますし、子どもでもわかったりします。別に外国語が自分の言語じゃない人にもわかりやすくなるのだなあという効果もあるので、いろんな意味の情報、多メディアから多言語、それから双方向のコミュニケーションというものを網の目のように、できるだけ張り巡らせていくのが効果的ではないかと思います。

(池上)

はい。ありがとうございました。

もうひとつだけあります。FMわいわいでは多文化の子どもたちの映像制作、ドキュメンタリー制作などをするというのですが、費用はどうしてるんですかという質問です。

(吉富)

先ほども申し上げましたが、組織の説明はあまりできなかったのでもう少し詳しく説明したいと思います。震災のときに救援基地として機能したカトリックの教会の敷地内にいくつものグループができて、それが今9つの団体になってそこを拠点として活動しています。たかとりコミュニティセンターといいます。ホームページを見ていただいたらいろんな団体が出てくると思うんですね。私たちはカトリックではないんですけど教会が地域活動に対して本当に共益費程度で場所を提供してくれているという状況で、それはありがたいですね。その中で、地縁組織も含む9つの団体が活動しています。地域の自治会のネットワークなんかも入っていて、テーマ別の団体だけではなく、また介護のことをしている団体もあれば、ラジオ局があったり、私の所属で紹介していただいた翻訳通訳センターもあったりするんですね。その9つの団体が、それぞれ別の団体でそれぞれ会計があって、それぞれ役員がいて大きさもまちまちです。常勤スタッフがいるところもないところもありますね。その中の4つが私がマネジメントする団体で、この4つは、FMわいわいと多言語センターFACIL- 多言語センターFACILはNPO法人です- それからワールドキッズコミュニティという任意団体、それにAMARC日本協議会という、世界の5千のコミュニティラジオのネットワークの日本の窓口としての協議会の事務所、です。この4つを、実はグループ事業としてまとめて、多文化プロキューブというグループとして運営しています。その中のワールドキッズコミュニティの中に、さっきのレックプロジェクトというのがあるんです。非常にややこしくて申し訳ないんですけど、この4つの団体で、約20人くらいが職員として働いています。ラジオ番組は、ほとんど地域住民が入れ代わ

り立ち代りボランティアで200人くらいでしています。そして翻訳通訳センターは28言語で対応し、これも約550人の翻訳、通訳登録者がいてコミュニティビジネスを展開しています。この20人をどこがどう雇用しているかですね。例えばワールドキッズコミュニティという団体に関していえば助成金をもらうことが多いですね。民間財団ですとか市とか県とか、助成金をもらうことが多いです。なので、さっきのレックプロジェクトでいうと、これは社会的に意義があるということで助成金を得やすいプログラムになっています。でもそこで働く職員の人件費などの事業費は、実は翻訳・通訳事業が、このグループ全体を支えています。今年度の翻訳・通訳事業費は8千万くらいでしょうか。それでその職員がラジオの仕事もしたり、子どもの活動のコーディネーターもしたりということをしていて、この翻訳・通訳事業が主な収入源になっています。その翻訳・通訳で活躍している人の多くは外国出身の日本語がものすごくできる翻訳・通訳登録者なんですね。その人たちにきちんと対価としての翻訳・通訳代をお支払いして、うちもそのコーディネートに関する経費を取っています。で、翻訳・通訳業務だけではなく、ウェブにしたり映像にしたり、ウェブデザイナーの職員もいますし、ホームページを作成できる職員もいますし、音声を作る者もいますし、映像制作をする職員もいますので、多言語でのいろんな制作ツールとしての仕事もして、やり繰りをしています。以上です。

(池上)

はい。ありがとうございました。

それではイシカワ・エウニセ先生に質問が。全体の流れの中で取り上げさせてもらったので2つに絞らせてください。ひとつはブラジル人の子どもの教育への考え方について。日本人の場合、子どもの教育のためには自分を犠牲にしても、何をおいてもやるんだという考えがあるけど、ブラジル人の親御さんはこういう考えを持っているのでしょうかということ。その延長線上で、第1部であまり触れられなかった、日本で育つ第2世代の今後の日本社会の適応について課題や展望をお話いただけますかということ。親の考え方と第2世代の子どもたちの日本社会の適応についてお願いします。

(イシカワ)

質問ありがとうございます。親が子どもの教育に関してどう思っているのかというと、これは日本人の親と変わらないまま子どもの教育は大事だと思っています。ただし、例えば子どもが日本の学校に通っていて、親が授業参観に来ないとか、運動会に来ないということで子どもの教育に興味がないだろうと思われることが多い。中学校を中退するといった問題があって親があまり教育に関心がないというイメージがあり、そういう話が結構一人歩きしてしまうのですが、その背景にはいわゆる日本の学校におけるさまざまな問題や、親が置かれている状況の問題があります。ブラジル人の親が子どもの教育に力を入れないのか、子どものために犠牲にならないのかということ、見方はいろいろあります。例えば日本からブラジルやアメリカに行った移民は、まずは子どもの教育に力を入れて、その子供

は海外で成功したという話は日本で非常に伝わっていますが、実際は成功しているケースだけではありません。同じ考え方で言いますと、日本にあるブラジル人学校の例があげられます。様々な種類の学校がありますが、大体授業料が月4万から、高いところで6万円です。ブラジル人家庭のほとんどでは夫婦共働きですが、片方の親の収入は全て子どもの教育に与えられているという家庭もあります。だからそれを見ると、それだけ子どもの教育に力を入れているとも言えます。自分の子どものために自分の収入のほとんど、もしくは全てを注ぎこんでいることを見れば、非常に犠牲になっているという見方もできます。外国人の子どもの話題の中で、一般的には問題がある子どもの情報が強調されますので、外国人の親は子どもの教育に全然興味がないという考えが日本社会に伝わっていくのですが、ブラジル人の中ではそれなりに子どもの教育にかんして、心配している家庭の方が多い。そうではない親も中にはいると思いますが、一般的には子どもの教育に関して非常に心配している。ブラジル人の親に話を聞きますと、例えば日本の学校になぜ行かせているのかというと、日本の教育の方がいいからとか、日本の学校の教育制度はブラジル国内より良いため、日本の方で教育を受けさせたいという思いを持って学校に通わせている家族もいます。ただそこに入ってみるといろいろ、言葉の問題、習慣の問題、学習言語を習得する難しさといった問題などに直面してしまう子どもが多い。

後、第二世代の話ですが、今日の話にもありましたが、ほとんどのブラジル人は自分の考えではいずれはブラジルに帰ると思っていっても現実的に日本での滞在が長期化しています。子どもたちからすると日本の社会が自分の社会。日本で生まれ育った子どもにはブラジルといっても外国にすぎない。もちろん親がブラジル出身ということで、ブラジルの文化的な背景を維持するのはプラスになるんですが、子どもからすると自分の1番できる言葉、自分の表現ができる言語というのは日本語になりつつあるし、日本しか知らない子どもが増えています。

その結果、自分の1番知っている社会というのは日本である。ですから今後一般の日本人と同じように日本で生活していく外国人の子どもが増えていくだろう。今後その子どもたちがどういう教育を受けていくのか、例えば家ではポルトガル語を教えた方がいいのか、日本語を教えた方がいいのかと、いろいろな議論があります。私はそれぞれの家庭で自由にすべきだと思いますが、とにかくひとつの学習言語を身につけるとするのが重要であると思います。日本で生活する上ではアイデンティティーがどうなのか、国籍はどうなのかという問題以前に、まずは日本語の言語を身につけて日本語の教育を受けて、つまり日本の社会で日本人と同じように生活できるようになっていくだろうと思います。

(池上)

はい。ありがとうございました。

最後のプレゼンター、広瀬先生にも質問があるんですが、これについては先生に直接お願いしたいと思うのでまた時間も30分たってますので、フロアからご意見(コメント)をいただきたいと思います。まず最初に、さっきとよた日本語システムの件で名前が何度も出た土井さん、ご起立いただけますか。はい、とよた日本語システムの立役者、中



心人物ですね。土井さんに、日本語のところが重点でも言いし、もう少し広い話でもいいけど、第1部を聞いた上でのコメントあるいは質問などをいただければと思います。

(土井)

個人的に気になったのは、今後の構想のところでもあったのですが、日本語教員養成課程ってというのがどうあるべきなのかという点です。これは日本語教育全体の問題だと思っています。例えば、お医者さんだと医療専門分野が分かれています。内科があったり、何科というのが置かれていたり。風邪を引いたときに、「じゃあ歯医者さんに行こう」と思わないですよ。けど、日本語教員に関しては、取り敢えず、日本語に関しては全部日本語教員にさせてしまえというようになっているのです。その中に本当は、留学生を教える人、ビジネスマンを教える人、いろんなタイプがあって全然違うんです。日本語教員だったら何にも対応できるって訳じゃあ全然ないと思うんですね。

今本当に困ってるのは何かというと、定住外国人の方、そして子供の教育、この2つです。全く日本語教育が手をつけてこなかったところ。なので、今後は多分、そこは専門化されて、細分化されていくのではないかと個人的には思っています。

その中で、先ほど報告であったように、こちらの大学が授業の中で、教える対象を子供というところに広げていたり、草の根レベルの教員を養成しようとしていたり、というところにごく関心を持ってきていました。ですけど、そのようなカリキュラムというのが（日本の教育では）全くできていないので、どうしていくのかなあというのが感想です。

(池上)

はい。ありがとうございました。それでは今のところから答えていただきましょう。

(広瀬)

ありがとうございます。質問用紙にも同じようなことが書かれていて、専門性とかどうしていくのかっていう点なんです。正直土井先生と同じことを感じていて、いろいろ細分化してある部分に関してすごく社会的な状況を含めて知っていかなければいけないし、会話に得意なところとか、聞ければいいとかそういったさまざまなレベルに対応していく人を育てなければいけない。正直ウチのように日本語教員養成課程コースという形でできていないところでこれだけのカリキュラムを用意するところはないです。だからといって諦めるのか、しょうがないのかってやっていくのかってことになるんですが、そうではなくて、土井先生にも今後来てもらうようお願いしてあるんですが、正にそのどんな特色を出しているのかっていう質問も出てきていろんなことをまとめて答えてしまいますが、企業と言語教育というようなカリキュラムを、半分は JICA とか浜松の実際にどんなことを支援してどんなことをやっているのかっていう、そういった生の声を聞きたい。一方で愛知県の豊田でやられているような日本語支援システムといったものを学生たちが話を聞いて、かつ、じゃあその後知識を得るためにどうするのかっていうことなんです。寧ろ外に出て実際に学ばせて教えてもらいたいんだっていう風に、実際にボランティアとかに出て

行っているいろんな社会で、地球レベルで活躍されている、ノウハウを持っている方にいろんなことを教えてもらいたいんだと。で、大学で専門的なことに関してできることは、基礎的なことは教えるんですが、細かくなってくることとか必要なことはその都度その都度教えてあげてくれないかっていう体制を作り上げていく、そのために窓から外を覗いたり外に1歩出てみるというような私の比喩的な発言があると理解していただけたらと思います。

(池上)

はい。日本語関係ではない人には専門的なやり取りのように聞こえるかもしれませんが、もうちょっとだけお付き合いをください。

次は浜松及び周辺部で非常に精力的な活躍をされているNPO法人浜松日本語・日本文化研究会（にほんごNPO）の加藤庸子さんから2つ質問をいただいています。外国人児童の支援。そういう人材育成ということだけでも、カルキュラム上のこと。とくにブラジル学校と連携した実習というのの意味についてももう少し訊きたいということ。それから愛知教育大学のリソースルームを参考にしたリソースルーム構想というものがあったけどこれについてももう少し具体的にどうかということなんですが。

(加藤)

にほんごNPOの加藤です。今日は広瀬先生、ご意見ありがとうございました。とても大きな期待が今胸いっぱい広がっているんですけど、愛知教育大学のリソースルームで実は友人が働いているんですね。そこは地域の核となっていていろいろな学校や地域支援団体の相談にも当たっているようなんです。そこから学生も送り出していますし、送り出す以前にその学生に対する教案（指導案）の作成主導とか専門性を持った職員が常駐していて特に相談機能も持っているということですね。それからさらに教材、教員も充実したものを揃えていて、そこでいろいろな、どんな教材を使ったらいいんですか、どんな教案がありますかっていう質問にも具体的に答えることができるというような非常にいい、こちらから見るとうらやましいような施設があるんですが、それが是非この集住地域である浜松にもあったら、私たちもNPOとして学校へも、日本語教師を学習支援者、指導者として派遣していますし、地域の生活者としての、外国人の皆さんにも日本語を教えておりますので、そういう核としての機能、理想するのが実現できたらすばらしいなあって思っているんですが、そういう点でもう少し詳しいお話を伺えたらと思うんですが、お願いします。

(広瀬)

まだ絵に描いた餅状態です。実際に進んでいる訳でなく、とりあえず、やれることからということになります。これも質問内容にあったんですが、「小さいからこそやれるっていう機動力のよさがあるのではないのでしょうか」と。小さい大学だから出来ることとして、今池上先生と、来年度に向けてどんな仕掛けをしてこうかって考えている最中です。まずは、加藤先生がおっしゃったとおり、行き場というか、ここに連絡すれば何か得られるっていう部屋をつくりたいなと思っております。愛教大も早稲田もそうなんですが、どんな授業をしているのかがわかる指導案が蓄積してある場があるだけで、それだけでもかなり

違うと思うんです。で、パワーポイントを使った話の中でも出したんですけど、リタイア教員の手助けを受けて、教育のネットワークを作っていけないかと。本学は教育大ではないので、小学校でボランティアを行う際などに、小学生に教えるノウハウまでは指導できません。この点で、愛教大のような小学校の教員養成課程の教育を受けている学生がボランティアするのは違います。そのため、学校現場とくに詳しい方に助けてもらうしかありません。本学は元教育長とか学校現場につながりがある方がたくさんいらっしゃる。聞いた話なんですけど、静岡では各教科でネットワークみたいなもの、例えば、算数に関してネットワークがあり、そこに連絡すると、リタイアした先生たちが支援してくれるっていう制度があるそうなんです。そういった制度とコミットしながら、一緒に協力してもらう。うちの大学に時々来てもらって、学生たちにそのまま指導してもらう。たとえば、足し算とか、中学では $x$ を使って解いていく方程式みたいなものの教え方とか、教えるときにどんなことに気をつけていくべきなのか、どのように教えたらいいのかとか、そういったアドバイスをいただける場を作っていきたいなと。まずは手始めにこんなことを考えています。

(池上)

それでは後 20 分ありますので、フロアの皆様から、もちろんご質問としてもお受けしたいんですが、一方で私たちの今日のこのシンポジウムは私たちの大学が多文化共生分野で地域と関わっていくときの方向性をお知らせした上で、「こんなこともできると地域としてはうれしいぞ」、「こういうことを是非取り組んでみてはどうか」というようなご指導ご鞭撻をいただければというのが私の趣旨です。挙手をいただいてご発言いただきたいと思えます。はい。どうぞ。

(会場から：オオサト)

岐阜県的美濃加茂市から参りました、オオサトと申します。貴重なお話をいただきましてありがとうございます。

2 点伺いたいんですが、ひとつめは、私はブラジル出身の者なんですけど、ブラジル人の出稼ぎという形で日本に来てから 20 年以上たってまして、だんだんブラジルの方も高齢化しているんですね。その中でおそらくこれから外国人の、特に日系 2 世の高齢化も大きな社会問題となってくるのではないかなと思ってるんですけど、その中で例えば先進地である静岡や兵庫県でどのような活動が行われているかを教えていただければと思ひまして。

2 つ目は、静岡空港でフジドリームエアラインズという航空会社があると思うんですけど、その航空会社はブラジルのエンブラエル社が製造している航空機を使ってまして、全ての機体はそのエンブラエル社が製造してるんですね。その中で静岡県民がエンブラエル社が静岡空港から日本の空を飛んでいるということについて日本人の静岡県民はそれを知ってるかどうか、それについてまたどのような相乗効果が起きてるかは聞かせてもらいたいんですね。それで吉富先生がお話されてました、ブラジル人にとっての誇りですね。私が出身である国でできた飛行機が静岡空港から飛んでるということを誇りにも思えるんじゃないかなと、吉富先生のお話を聞いてまして。静岡の子どもたちにはいい話じゃない

かなと思ひまして、皆さん、エンブラエル機がどのような影響を与えるかも是非聞きたいと思ひます。以上です。お願ひします。

(池上)

ありがとうございます。まず高齢化に伴う対応ということで、それはおそらく吉富先生にお話いただく方がいいのかなという気もしています。

(吉富)

兵庫県というのはいろんな国出身の人が、データにすると数は多いんですがこのようにある国の人が集住しているという地域ではないので大きな何かってことではないんですけど、うちの中で生まれて、今は外でがんばっている団体のひとつで、在日の3世の人が代表のハナの会という在日1世の人のための介護事業、デイサービスとかのNPOがあります。年を取ってくると自分の言葉で話したいとか、その方が楽だとか、食べ物についても日本の地域にある介護施設では不十分なところがあるので、当事者の、そういう自分たちのための介護施設を立ち上げているところもあります。あと、NGOとしてベトナムの人たちが運営している団体が同じ拠点にあります。ベトナムの人はブラジルの人よりちょっと早い時期に日本に来たので、まさに高齢化しているんですけど、なかなか介護施設を作るところまでにはなっていないんですが、助成金とかで、少しは市の予算なんか何とか付けて、看護師さんと通訳の人がペアになってお年寄りのところを医療訪問して、何か体の調子は悪くないですかっていうような活動をしています。やはり言葉の問題で病院に行くのを我慢してしまったりだとか行ってもだめだと諦めてしまっている人も多いので、訪問して、そして話を聞くっていうことを始めたわけですね。私の身近なところではそういうところですね。

(池上)

はい。ありがとうございました。

愛知県のことでお分かりの範囲で山本先生お願いします。

(山本)

先進的な事例としては吉富さんも上げましたけど、在日韓国朝鮮人たちの事例というのを見るのがいいだろうと思うんですね。いまこちらでも在日の3世がとおっしゃいましたけど、愛知県でもコリアネット愛知というのがありまして、実は語弊がありますが北朝鮮系だといわれている総連といわれる団体の傘下にあります。ただその総連の人たちも本国志向ではなくて、在日の中でどうやって生きていくかってことで老後を助けるっていうような意思の下でNPOを作ってあっちこっちデイケアを今開設してるんです。で、おっしゃったように総連系の学校(朝鮮学校)を出た子たちがそこで職員として活用される例が多いものですから、20代でも朝鮮語をしゃべれるんですね。韓国語というか、朝鮮語というか、だから1世の、認知症が入ってしまうと日本語か朝鮮語がよく分からない言葉をしゃべられるんですね。混ざっちゃうというんですかね。だからそういう人たちに対して

朝鮮語や日本語で対応しながらデイケアをするとすると、認知症が多少進行が止まるというような事例も紹介されています。美濃加茂はお近くですのでもし関心があればご案内します。そういう意味では今ブラジル人たちも不況を受けてあっちこっちで介護職の養成をしていますよね。私は社会福祉学科に所属してますのであの動きは正直言ってあまり気分はよくなかったんですね。もう少しプロフェッショナルなものだろうと。失業した、だから介護職になったら、それはないでしょうと動きの中でも思ってるんです。ただそれはひとつチャンスにして、今言ったような在日の事例がある訳ですから、ポルトガル語ができるとかブラジルの文化を知っている、ブラジルの食事がちゃんと作れるというような専門職の人たちがこれから養成していくというのでは、私はきっかけはよろしくないとおもうんですが、今後そういう風にもしその教育の中できちんとその人たちをトレーニングしていくというのは今後求められていくことだなと思っています。

(池上)

はい。ありがとうございます。私自身はあまりこの分野は詳しくないんですけど、浜松なんかでは民間レベルで介護サービス業をやっているような方々がブラジルの方を新たに雇用して非常に評判がよいんだというお話をされているのを聞いたことがあります。当面ケアされる側は日本人の高齢者なんですけど、おそらく近い将来日系人の高齢者がケアされる側になっていく事態があともう10年かそこらで来るだろうと思っています。そのときにケアする側の労働者として日系人の方が入ってるというのはある意味必要なサービスなのかなって私自身は思っています。

それからもうひとつ静岡空港の飛行機の問題があるんですが、これは私も分からないので、今日たまたまですけど、県庁の栗林さん、回答していただける準備はありますか？

(栗林)

ご指名をいただきました、静岡県国際課の栗林と申します。今の件ですけど、静岡県民がどれくらい知っているかと言われてもここの定かなものは分かりませんが、多分FDAのホームページ等、会社を立ち上げたときにそういったアナウンスをしたと思います。私は国際課の方で、静岡県に在住する外国人の約半数がブラジルにルーツを持つ方だということですから、パネル展をいくつかの市町村さんと協力をしまして連携していただきまして開催しております。その中で30枚ほどのパネルがございまして、まず一般的なところから、ブラジルってどこにあってどういった気候でどういった民族の人で構成されてみたいところから始まるんですが、その中でいわゆるエンブラエルの機体を静岡空港に、FDAで使ってるっていう記載はさせていただいているところであります。そういったパネル展やってくる中で見ていただける方がこの県民の中で数少ない中ですけど、そういうことをブラジルのことと合わせて広く周知していきたいということで先ほどから話があります、そのレベルからそういったところで今みたいな話も合わせて理解をいただくということも相互の理解の一助になったり、あるいは静岡空港のアナウンスにもなるのかなって思っています。

(池上)

ありがとうございました。一方でそういう情報を是非ポルトガル語でブラジルコミュニティでも発信していくと、子どもたちが「ああ、ブラジルの飛行機がこの空を飛んでるんだ」って、元気になるよなっていうアドバイスをいただきました。

それでは後 10 分あります。それでは山口祐子さん。

(山口)

私は浜松市民ですけど『虹の架け橋教室』という不就学の教室のちょっとそばにいるんですね。担当している訳ではありませんけど、そういうところから見えていく日本語指導の問題なんですけど、私は 3 重構造が必要だと思ってるんですね。まず日本の小学校に入ってすいすい行く人は全く問題ないんですね。家族の問題が結構大きい訳ですね。離婚ですとか失業ですとかさまざまな関係で家族の問題がある。だから家族の問題をケアできる仕組みが日本語学習の周辺になければいけないんですね。さらに拡散していくと確定申告の受け方だとか年金の手続きだとかそういう社会的なソーシャルサービスにつながっていく訳ですけど、それが、カウンセリングを含めて家族の支援。人権侵害や弁護士も含めてそういうネットワークがまず、非常に広い裾野としての富士山を描いていただければわかるんですけど、それが大事。そして初めて子どもの生活環境が安定して、子どもはここにいていいんだよという、学校に行っていなくてもここにいていいんだよという居場所が 2 番目に大事。居場所ができたならその次に日本語。それからさらに学力を高めていくっていう、このところの連続した支援の仕組みがあることが非常に重要です。

浜松は点在していますけどそういう資源が少しずつ見えてきていましたね。従って文芸大がそういう資源をもっと見えやすい情報提供をしながらそれを統合化していくような仕組みが、もちろん私たちレベルでもやりますけど、いろんな世界の例などをご紹介いただきながら。その 3 重構造があれば子どもたちは確実に幸せになれると私は確信しているんですね。日本語を習得してさらに学力を身につけるというところにまだまだ手探り状態があるんですね。

太田市なんかは早々とその部分に気が付いて、ブラジルで教員免許があつて日本の教員免許はなくても、6 人か 7 人が特区を取られて小中学校に呼ばれて、高校の進学率も 80 %に上がっていましたよね。そういう特区化していない日本全国で可能だと思うんですけど、最終的には高校へ行って大学へ行ってという道筋をどう付けるかという、いろんな社会資源を使うということが重要であることがひとつあります。

もうひとつは、今日もそうですけど、もう第 2 世代、第 3 世代が浜松にもおりまして非常に優れています。多少日本語が不自由でおかしいかもしれないけど人間としての力は非常に豊かです。そういう若い世代が本当にたくさんって言っても数十人レベルかもしれませんが、その方たちが日本の社会の中で十分力を発揮できるような仕組みを、日本社会は作っていかなければもったいない。で、その受け皿として若い学生たちがたくさんいる静岡文化芸術大学が何らかの形で企業とかそういうところに情報発信できるような仕組みがあると、彼はさらに学ぶ意欲を持てるんじゃないかと思います。私も大分発掘していますから、いろんな発掘した場所が大学であつたり違うと思うんですけどまずそのすばらし

い人たちが力を発揮できる環境はどういうものかっていうことを一緒に語り合っていきたいと思います。

(池上)

はい。ありがとうございました。まだまだきつとご質問、コメントがあると思いますが、時間もそろそろ来ていますので、今の具体的な30分ほどに対する大学としての対応も含めて広瀬先生から一人ずつ最後のコメントをいただければと思います。まだまだ言い足りない部分はその後隣の交流会でっていう風にご理解いただければ。それではどうぞ。

(広瀬)

企業へのアピールという点で正に日本語教員養成課程というのは本当に日本語教師を育てるだけではないので、正に目的の中のひとつを上げた、企業に入ってもそういった人たちが、いろんな事情を分かる人たちがいるっていうことは、うちの大学を卒業して多文化共生とかいろいろとその外国人の問題、さまざまなこと理解がある人たちが輩出されていくっていうのはもうそれだけで、いい人材がいるんだよっていうアピールにつながっているんじゃないか。その一歩を出しているつもりなんですけど、甘いですか。

後、学校現場の問題に関しては正に早稲田のお膝元である目黒区なんか積極的にやっていますが、ようやく学校間との連携ができた、コーディネーターっていう職を置きながらできてきたっていうところの、まずそういったところから始め、浜松なんかもそういったところの存在というか、ポストができるようになったらいいなとかそれはプッシュしていきたいなと思っているので。

(イシカワ)

フロアからの意見で、3重構造についてですが、まず子どものことを考える前に親が安定した生活をしていないとその子どもに安心感を与えられないのは確かです。在日ブラジル人に限って言いますと、もう20年間日本にいまして、20年間同じ不安定な状況で仕事をしていることが問題の一つです。日本の経済は回復しているとはいえ、特に最近の1～2年は在日ブラジル人のほとんどの契約は、2、3ヶ月の契約です。ですからその2～3ヶ月の契約を更新しながら仕事をしているため、2ヵ月後、3ヵ月後に仕事があるかどうか分からないまま仕事をしています。その状況のなかで子どもの教育をどう考えるのかというのは非常に難しいのは確かです。ただ子どもたちはある意味で逞しい。親の問題はありますが、学校に行って勉強してその中で育て、日本人の友達と一緒にわいわいしていると言えますか、日本の社会で生きているのは確かなので、3重構造が整えば本当に理想です。しかし、それが実現するのを待っていれば今の子どもたちには間に合いません。待っている間に彼らは大人になってしまいます。そういう面では今は大学としてできるのは、まずは教員を育てていくということですが、一般的に言いますと、地域社会、学校、様々なところでとにかくその子どもたちが教育を受けられるようなサポートを一人一人がしていけたらと思います。

(吉富)

山口さんがおっしゃったとおり、力をもった若者が活かされていないのはもったいないので、若者たちが活かされる社会って本当に大切なことだと常々思ってますね。ただ活かされる場所について考えるときに、私は目先のその対症療法的な- もちろん今ここにいるこの子たちのためにとということも大切ですが- それと共に、将来の、何十年も先の教育をどうするのかということ、両方合わせて考えないといけないと思うんです。日本のそもそもの教育の中で職業というものを一体どう捕らえていくとかっていう、根本的な問題から考え直すべきだというふうに思っているんですね。高学歴だけがいい仕事なのかとか。そういう中において、妙な格差ができていて若者が体を使う仕事を嫌がるとか、そして若者がホームレスになっているとかという状況があります。まず日本社会の中で、仕事に関して何に誇りを持つか、仕事というものをどのような価値を持って考えるか、そこをまず考えるような教育をしなければならない。結局その格差社会の、例えばそういう価値観の中で下の方に、言葉のハンディがあるような人たちがくるというこの構造が変わらないわけですね。だからまずは、例えば日本は溶接の技術だって世界に誇るものがあって、そういうものづくりのところに跡を継ぐ人がなくて、そこにベトナムからの研修生がきたりしてその技術は誰も引き継いでいかないっていう現状があります。その仕事というものに対する価値をもう一度教育の中に見直さないと、それと共に、いろんなすばらしい仕事がいっぱいある中で、いろんな技能がある人たちが本当に誇りを持って仕事に就けるという見方で全体に活かすことを考えなければ行けない。別に外国出身の人だけじゃなくてこの人がどう社会の中で活かせるかという大きな視点が抜け落ちているような気がしてしょうがないんですね。その中で誰もが自分の生き方に納得ができて、この社会で誇りを持って生きられるという社会を目指したいと思います。

(池上)

はい。ありがとうございました。

(山本)

吉富さんが決めてくださったからもういいような気もするんですが、私は元々今日在日韓国朝鮮人の事例をわざと出してるのは、私は元々こうしてブラジルとかその地域、日系、日本でいうブラジル人の研究をする前にずっと在日のことをやっていて、一昨年くらいからもう1度、15年位前に随分聞き取りをした人たちにフォローアップをするというインタビューの調査をまた開始してるんですね。そういう意味で随分またこの15年くらいの間で、在日の人たちが何を考えこの日本の社会が変わってきた中で、古くからいる定住外国人である在日の3世、4世たちが何を考えているのかっていうことを聞き取る機会がたくさんあったんですね。

その中で一人の、私すごく印象的な話があるんですけど、在日の3世の女性で30代半ばです。自分の旦那さんのことを語っていました。旦那さんは私たちのもう20年くらい前からの、ずっと対象者にいる方なんですけど、朝鮮学校を中学まで出て本名1本で生きています。彼について、出会ったのがネットだと。出会ってすぐに結婚を決めましたとい



う語りの中でどう言ったかって。結婚を決めた理由は何ですかって言ったら、もう出会ったその日に私は、旦那さんが、本名で、例えばパクチョルとかって名前だとしたら私はパクチョルですという風に言ったと。それを聞いて自分は衝撃を受けたと。パクチョルという1本の名前で凄まじく真っ直ぐに朝鮮人としてこの日本の社会で生きているこの人はすばらしいと思ったって言うんですね。その人は今まで日本名を使ったり朝鮮（韓国名）を使ったりして何かふらふらして生きてきてしまったと。で、その自分の旦那さんに出会ったときに、こういう生き方もあるんだという風に思ったと。生まれた子どもはなかなか総連系の学校には入れにくいんだけど韓国系の学校は大阪にはありますのでそこに入れようかなあと思っているっていう、1歳の子どもについて語っていたことがあるんですね。

今吉富さんがおっしゃった話と通じると思うんですけど、今そういうところに子どもを入れるって、今の高学歴がいいとか、ホワイトカラーに付かなければっていう中で非常にマイナスの選択になりうるんですが、でもやっぱりそうやって自分のルーツを、どうやって誇りを子どもに持たせるかっていうことを考える在日がまだこれだけ日本化しちゃったっていう風にいわれる中でのいるっていうのは、やっぱりこの日本の社会のある意味では、日本の社会が切り捨ててきたものをこの人は表してると思ったんですね。

で、私はその後、さっきからちょこちょこって言ってるんですけど、いろんな立場の方がいらっしゃるけど私自身は朝鮮高校も無償化すべきだって思ってるものですから、愛知県内でその運動に結構まじめに関わりました。その中でも結構スピーチする時間があったんですけど、そこで朝鮮高校の子どもたちを見ていて思ったことも同じことです。すごく不利な中で生きている部分はあると思うんですね。日本の大学にも少し遠くなってしまうし、エリート校にはなかなか入れないしと。でもあの子たちが1本の名前で堂々と生きている姿を見てやっぱりこういう部分はそういうところを選択しようとする人がいる限り保障しなければいけないと思った訳ですね。だから日本社会は余裕の部分というか、そういうものを大事にしながらどういう社会を構築しているのかというのを改めて多文化共生社会っていう風に言うならば、そうしたオールドカマーだっていう人たちの事例からも含めてもう一度社会を考え直す必要があると思っているところです。

(池上)

はい。ありがとうございます。最後私は手短に行きます。本来であればここでお一人のコメントを私なりの言葉でまとめるべきなんですが、もう時間もありませんのでここでは省略します。

私なりに今浜松の状況を考えたときに、やっぱり一つ大きな転換をして新しい地平が見え始めているなという認識をしています。何といてもリーマン・ショック以降の経済の変化、雇用環境の大きな変化という中で、それでもこの国で生きていこうという風に考えている人が間違えなく増えてきているし、また迷っているけどおそらくずっとここにいるんだろうなって思ってる人たちの数も増えていくと思うんですね。先ほどフロアからもご指摘があったように、若い人たちが、私の認識ではここ4～5年の間で明らかにこれまでと違う形の社会参加をしていると思うんです。それは高校に進学する子どもたちがまだ少ないけど確実に増えているということ。さらに浜松に限って言っても、大学に進学する外

国につながる子どもたちが、これも本当に数えるほどだけ確実に増えているということ。その子たちが自分たちの栄達だけを考えるのではなくて次の世代にどうつなげるかということを実際に考えているし、自分たちの生きてきたまだ短い半生をどうやってこの日本社会に伝えていくかということにもものすごく熱心だというのを目の当たりにしています。

そこで私はこの社会参加という言葉を決回のキーワードに使ったわけなんですけど、どうしてもこれは上から目線で、外国の人たちも滞在は長いんだから日本の社会に入ってきたなさいと言ってしまいがちな受け入れ社会が、日本の社会はあるんだけど、結局そうやって多様な人たちに関わっていただくことによって私たちの社会は間違えなく豊かになるし、活力が出てくるし、そして受け入れ社会の側にとってもそれは気づきや学びにつながっていくと。吉富先生は最初ご報告の中でお話してくださったように、プロジェクトに関わる中で、関わる日本の学生たち、若者たちが随分変わるんだっていうことですよね。それは若者のプロジェクトに限らず地域社会でも、学校でも起きうることだし、起きてほしいことだと私は思います。

今回どうしても私共の大学の都合で、公立大学になって向こう6年の青写真ができて、具体的には、この後予算を確保してどうプロジェクトを組むかっていう段階にいます。ある意味で言うと仕掛けどころなんですね。その仕掛けどころで私たちが考えてるだけじゃなくて是非皆さんのお知恵、ビジョンというものをいただきながらこの町を、この国の社会を、豊かなものにしていきたいと思って今日この会を持ちました。お休みのところ、さきほど学生から報告を受けましたが、100名を超える方にご参加いただいたことを深く深く感謝申し上げます。それから忙しい中来てくださった山本かほり先生、吉富志津代先生にもこの場を借りて改めて御礼を申し上げたい。ということでパネリストの皆さんに拍手をお願いします。

ありがとうございました。